

|         |   |
|---------|---|
| 氏名(本籍)  | 田中伸一(大阪府)   |
| 学位の種類   | 博士(言語学)   |
| 学位記番号   | 博乙第1566号  |
| 学位授与年月日 | 平成11年11月30日   |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当  |
| 審査研究科   | 文芸・言語研究科  |
| 学位論文題目  | Theoretical Issues of the Lexicon and Phonological Structure<br>(レキシコンと音韻構造の理論的諸問題) |
| 主査      | 筑波大学教授 P h. D. 原口庄輔   |
| 副査      | 筑波大学教授 P h. D. 中右実  |
| 副査      | 筑波大学助教授 文学博士 廣瀬幸生   |
| 副査      | 筑波大学教授 文学博士 藤原保明  |
| 副査      | 筑波大学教授 林史典  |

### 論文の内容の要旨

本論文は、語彙音韻論 (lexical phonology) を理論の中核に据え、制約・修復策 (repair strategy) 理論、不完全指定 (underspecification) 理論、韻律強勢理論などを援用した統合的枠組みに基づき、個別言語のレキシコンの内部と外部の音韻部門における音韻構造や音韻過程のあり方をあきらかにし、普遍文法がどのような形で個別文法に関わってくるかを理論的・実証的に追求したものである。対象言語として、北米インディアン・スー語族に属するウイネバゴ (Winnebago) 語 (ウイスコンシン方言) を選び、次の5点を中心に論じている。

- (1) 様々な音韻過程を記述することによって、レキシコンの内部構造をモデル化し、個別文法を構築すること。
- (2) 素性構造と分節素 (segment) の配列上の制約を解明し、分節素の分布と結合のあり方を予測すること。
- (3) 音節構造を解明し、その証拠を提示し、聞こえ度の階層とドーシーの法則 (Dorsey's Law) の生起メカニズムを解明すること。
- (4) 韻律構造を解明し、その証拠を提示することによって、アクセントの分布の予測を行い、ドーシーの法則とのパラドックスを解決すること。
- (5) 制約と修復策の相互作用を実証し、普遍文法と個別文法の関わりを解明すること。

本論文は、大きく4つの章から構成されている。第1章では、ウイネバゴ語の類型論上の位置を示し、歴史言語学や理論言語学(特に生成音韻論)においてこの言語が取り上げられた経緯とその問題点を明確にすることにより、この言語を対象とした理由と、本論文の目的を明らかにしている。また、各章において論ぜられる議論とその根拠の概要が示されている。

第2章と第3章は本論文の中核をなしており、有機的に関係づけられている。まず、第2章では、ウイネバゴ語の個別文法の構築が試みられ、様々な音韻過程の相互関係が巨視的に考察されている。この考察に基づいて、第3章ではウイネバゴ語のセグメント、モーラ、音節、韻脚 (foot) などの音韻構造が微視的に論ぜられている。観点を変えて言うなら、第2章では、(2)の素性構造と音素配列構造がいくつかの音韻過程との関わりにおいて考察され、また第3章では、セグメントの分布と結合のあり方が音節構造との関わりにおいて考察されている。

第2章の最も重要な主張は、ウイネバゴ語のレキシコンは循環レベルと非循環レベルからなる語彙レベルと、随意レベルと義務レベルからなる後語彙レベルによって構成されており、これら4つのレベルそれぞれに、様々な

音韻過程を捉えるための各種の規則が順序づけられて所属している、というものである。また、これら4つのレベルそのものも、上記の通り順序づけられて示すために、様々な音韻過程を包括的に提示し、各種の規則の存在を証拠付け、その順序関係を入念に論じている。このことによって、非循環レベルにおいては、「音韻部門における諸過程の適用は、形態部門の諸過程の適用よりも先に順序づけられる」という Borowsky (1993) のモデルの妥当性が裏付けられると論じている。さらに、普遍文法に属する制約や原理の存在を実証しながら、それらがウイネバゴ語の個別文法においてどのようなパラメータの値をもつかを論じ、それらの制約や原理が各規則にどのように作用するかを明確にしている。

第3章では、まず、音節構造の存在理由を、1) 子音結合の非対称的分布の説明、2) 可能な3子音結合の予測、3) 体系的空白の説明、4) 形態素境界との関連、5) 音節の歴史的発達、6) 韻律構造との関連、という6つの観点から明らかにしている。さらに、韻律構造については、1) 強勢の寄生的抽象的性質、2) 音調との関連、3) 弾音化、閉鎖音挿入、[l] の無音化、閉鎖音の有気化、リズム規則などの適用可能性、4) 可能な強勢移動の予測、5) 強弱格長音化、強弱格短音化などに関する証拠を提出している。これらの証拠に基づいて、ドーシーの法則が適用されるのは音節構造を構築する過程で生ずる音節構造に対する違反を母音挿入と母音調和によって埋め合わせるための修復策としてであると主張し、従来の研究ではその存在理由が不明であったこの法則に、初めて原理的説明を与えることに成功している。さらに、ドーシーの法則とアクセント付与に関して、一見パラドックスを含んでいるように見えるのは、母音挿入が適用される位置によることを明らかにしている。すなわち、通常の韻脚の場合、内部や外部に母音が挿入されると普遍制約への違反が生ずるため、アクセント規則が再適用され、修復されるのに対し、韻律外の韻脚の場合、母音が挿入されると、普遍制約上の違反が見えないため、修復は不要であることを明らかにし、この理論上の問題に対して原理に基づく説明を可能にしている。

第4章は本論文を手際よく要約し、規則と様々な制約の相互作用のあり方を明示的に示し、理論上の意味合いを簡潔に論じている。さらに、ウイネバゴ語の子音と母音の一覧、音節構造に関する情報および本論文の用例に現れた語の索引が付録としてつけられている。

本博士論文は、段階的派生を前提とするレキシコンモデルである語彙音韻論、制約・修復策理論、不完全指定理論、韻律強勢理論などに基づいてウイネバゴ語の様々な音韻現象が分析され、説明がなされており、並列処理仮説に基づく最新の最適性理論 (Optimality Theory) の枠組みには依拠していない。このようなモデル選択の根拠として、1) 個別言語の現象の分析は1現象1規則を仮定することによって言語事実を明示的に示すことが可能であること、2) ドーシーの法則がアクセント付与、e/a母音交替、鼻音化、重複 (reduplication) などと相互作用し合うことを明確に示すことができること、3) ドーシーの法則と曖昧母音挿入や隣接強勢移動と非隣接強勢移動などの規則との適用様式を区別するためには、語彙レベル・後語彙レベルの区別が必要であり、語彙レベルでは様々な音韻過程の適用様式が違うことから循環レベルと非循環レベルという2つのレベルが必要であること、などがあげられている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文はウイネバゴ語の音韻現象に関して独自の観点から包括的に分析を行い、ウイネバゴ語音韻論の全体像を明らかにするとともに、ドーシーの法則などの原理的説明を可能にし、それらに基づいて音韻理論研究の進展に多大の貢献をした優れた研究である。本論文の貢献は次の4点にまとめることができる。

- (1) ウイネバゴ語の音韻現象の全体像を包括的な音韻部門との関わりにおいて初めて明らかにしたこと。
- (2) 様々な音韻現象が信頼できる豊富なデータに基づいて明らかにされ、様々な規則の相互作用、および規則と諸制約との相互作用が明確に示され、それらの音韻現象が説得力のある形で説明されていること。
- (3) 真に説明力のある普遍文法のあり方を明らかにし、普遍文法における一般原理の研究の進展に貢献している

こと。

(4) 従来の研究では十分説明されなかったドーシーの法則などに関して極めて説得力のある独自の説明が提示されていること。

著者の研究方法は、理論的研究と実証的研究がバランスのとれた手堅いものであり、本論文における問題の設定方法も的確であり、当を得ている。さらに、問題解決への論拠方法も極めて明快で説得力に富んでいる。特に、ドーシーの法則に関する解明は本論文の最も大きな貢献であると言える。

本論文の今後の課題は、理論の枠組みにより精緻なものにすることである。例えば、最適性理論の枠組みによる理論化の可能性をさらに詳しく検討し、その妥当性を追求すれば、著者の今後の理論研究は一層進展するものと思われる。加えて、ウィネバゴ語のデータをさらに充実させることも望まれる。そうすることによって、本論文はさらに深みを増し、より確固たるものとなり、一層の発展が可能になるからである。

このように、著者の今後の研究に期待すべき面は若干残されてはいるが、本論文そのものは、国際的水準に照らして見たとき、記述研究と理論研究の両面において第一級の優れた論文として高く評価できる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。